

研究ノート

徳富蘇峰の“*The Far East*”について

齋藤洋子*

はじめに

“*The Far East*”は、明治29年(1898年)2月、徳富蘇峰が経営する民友社によって創刊された英文雑誌である⁽¹⁾。

刊行の目的については、第1号に掲げた「発行の趣旨」の中で、次のように記している。

もし日本が世界文明の発達において積極的役割を果たそうとするならば、我々は何としても日本と諸外国間の相互理解を確保する手段を見出さねばならない。日清戦争以来、世界の視線が、これまでにない大きな関心を持って我国に向けられている今日、これは最重要課題である。

現在、外国の報道機関は、日本の問題に大きな関心を寄せている。日本に関する記事の多くが比較的好意的であるのは喜ばしいことである。しかし、結局こうした情報源から得られるのは、外国の人々が我々日本人をどう見ているかということに過ぎない。日本や日本人への理解を促進するためには、日本と諸外国間の自由な意見の交換に供する場が必要である。

我々の今回の試みはこうした必要性から生

じたものである。(引用における拙訳は筆者による。以下同様)

日清戦争、三国干渉を経た当時の蘇峰は、日本が世界を知り、世界が日本を知ることが当今の急務であると考えていた⁽²⁾。そして、自らその役割を荷うという大志の下、英文雑誌“*The Far East*”は刊行されたのである。

同誌は、明治29年2月から31年7月までの2年6ヶ月間、毎月20日を発行日として1月も欠けることなく、合計30冊が刊行された。

この英文雑誌を扱った先行研究には、高橋虔氏の『『英文之国民之友』について』がある⁽³⁾。高橋氏は、当時同志社大学人文科学研究所が所蔵していた第1号から第19号を分析し、幾つかの論文に論評を加えると共に、各号の欧文、和文双方の目次を紹介している⁽⁴⁾。管見の及ぶ限りでは、高橋氏以後同誌に関する研究は見当たらない。そこで本稿では、高橋氏によって紹介されていない第20号から30号の内容に簡単な説明を加えると同時に、対象号の目次を紹介することとした。尚、紙数の関係で目次の紹介は和文のみとした。

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程1年

独立の雑誌へ

“The Far East”は、第20号を以って大きな転換をしている。当初この雑誌には“an English edition of The Kokumin no Tomo”つまり「国民之友英文之部」という副題が付されていた。しかし第19号の巻末に「従来国民之友の別冊たりし『極東』は九月以降独立の雑誌として発行せらる可し」との広告が掲載され、第20号からはこれまでの「国民之友の別冊」という位置付けから、「独立」の雑誌へと転換した。但し、注意しておかなければならないことは、従来同誌が国民之友の英訳版であり、第20号以降はオリジナルな記事が掲載されることとなったという意味ではないことである。従来から掲載記事においては、オリジナル記事の占める割合の方が高かったのである。

では、同誌の「独立」は何を意味しているのだろうか。それは、製作者側が同誌の必要性を再認識したことにほかならない。そしてその背景には、蘇峰の欧米漫遊と漫遊からの帰国があったと推定される。“The Far East”が創刊された4ヶ月後の明治29年5月末、蘇峰は同誌の編集長である深井英五を伴ない欧米漫遊へと出発した。この漫遊については紙数の関係で省略するが⁽⁵⁾、その目的の1つには、同誌の各国への販路開拓があったという⁽⁶⁾。この漫遊により蘇峰らは、西欧諸国が日本に対してあまりにも無知であることに驚いている⁽⁷⁾。創刊時に各方面に発送された企画書では、同誌を「日本の国家的抱負についての説明役」として広告したというが⁽⁸⁾、漫遊体験を得て、「日本を世界に知らしめる」という蘇峰らの使命感は一層強まり、同誌の転換をもたらしたと考えられる。

独立後の“The Far East”

では、具体的に独立後の“The Far East”にはどのような変化がもたらされたのであろうか。

まず、構成上新たに3つの見出しが設けられている。従来は、口絵、社説、特別寄書、雑録、時事といった構成であったのに対して、評論、投書、日記が新設されている⁽⁹⁾。

次に表記上の相違としては、第21号から従来「社説」の英文表記が“Leading Articles”であったのに対して“Editorial”に変更となっている。双方とも「社説」という意味を有しており、変更の理由は明らかではない。あるいは、“Leading Articles”では、「トップ記事」が第一義として連想されるため、より「社説」の意味合いを強調するために変更したのであろうか。こうした、構成上、表記上の新設、変更も欧米漫遊で新聞社各社を訪問し、調査をした成果の反映であったのかもしれない。

最後に内容についてどのような変化があったのかについて、簡単に触れておくこととする。

同誌の記事内容は創刊当初から政治、経済、社会、文化等あらゆる範囲に及んでおり、その点は独立後も全く変わっていない。敢えて相違点を探すならば、社説の充実を挙げることが出来る。従来「社説も時事と同様に時事に関する短文の類が多く」見出されたが⁽¹⁰⁾、独立後は短文に相当するものは見当たらない。内容については従来と同様に時事問題を取り上げているが、世界、あるいは日本の現状に対し、日本の立場を説明するといった色彩がより強くなっている。この時期蘇峰は、内務省勅任参事官に就任し新聞方面を担当している。就官に際し提示

した覚書的一条には、「新聞は日本国民ニ対しては現内閣を代表し、世界ニ向ては大日本帝国を代表スル事」とある⁴¹。また、明治33年に記された「新聞に関する種々『覚書』」では国家による新聞事業の必要性を強調している⁴²。同誌社説における論調の変化も、こうした蘇峰の思想を反映したものとと言えるであろう。

世界に向けての主張

では同誌は、世界に向けてどのような日本の主張を展開しようとしたのであろうか。

対象号の社説において、再三にわたり強調されているのは次の2点である。第一は、日本国家の平和的性質、第二は、日英同盟の必要性である。これは、当時日本国内で大きな懸念事項となっていた人種問題、極東問題への反論であり対策であった。

ドイツ皇帝がロシア皇帝に送った絵画に代表される黄禍論は、欧米の一部の人々の間に日本に対する警戒心を惹起していた。事実、“The Far East”第26号社説「人類と人種」では、イギリスのSpectator誌が、「日本が中国と連合して西欧諸国と戦う危険性」について言及していることを紹介している。

同誌は人種問題に対して、歴史的観点から反論している。それは、「西欧人が賞賛する日本の伝統的文化、建築物も文明の発達なしには存在することが出来ず、日本にこうした文明をもたらしたのは中国や朝鮮半島であった。アジア人という理由で文明を享受し得ない国と定義することは単なる人種的偏見であり、歴史性に根拠していない議論である」という主張であった。

しかし、同誌が西欧諸国に訴えたかったの

は、人種的偏見に対する反論だけではない。むしろ、日本が人種という枠組みを以って、西欧諸国に戦いを挑む意図など全く有していないという点を強調している。上記社説においては、「日本が中国を先導して西欧に付いて行くつもりはあるが、中国と組んで西欧に戦う気持ちはない」とはっきりと断言している。

蘇峰が後年「白濁打破」を唱えたことはよく知られている。しかし当時の西欧に対する彼の主張は、あくまで西欧への追随、協調であり、日本国家の平和的性質の強調であったのである⁴³。こうした主張は蘇峰の正確な現状認識の証左と言えるであろう。

第二に、日英同盟の必要性についての主張である。

明治31年ドイツの膠州湾租借をきっかけに、ロシアは旅順、大連を、イギリスは威海衛をそれぞれ租借し、中国は列強の利権争奪戦場と化した。同誌は極東問題に対して敏感に反応している。まず、第23号に「膠州湾の占領」を掲載し、ドイツの行為は宣教師殺害事件という格好の口実を得て、同国の極東に対する野心を満たしたに過ぎないと非難した。第25号「極東の形勢」、第27号「極東の均整」では、ロシアの中国、韓国における勢力拡大は極東の平和を危うくするものであるとの懸念を表明している。中国に対するドイツ、ロシアの行動に対して、「極東の平和維持を掲げて日本に遼東半島返還を強要した三国干渉の主張は一体何であったのか」と強く非難したのである。

一方、イギリス、アメリカの行動には好意的であった⁴⁴。ドイツ、ロシアに対抗してイギリスが威海衛を租借した事は当然のこととして理解を示している。威海衛は三国干渉により日本

が返還を余儀なくされた土地であった。しかし「威海衛から日本軍が撤退後であれば、イギリスの行動は合法的であり何らクレームをつけることは出来ない」とまで記している。同誌がイギリスに対して好意的であったのは、ロシアを牽制し極東のバランスを保つ上で、イギリスの存在は最重要であると見ていたからである。そして日本とイギリスは共通の利害を有するとして、イギリスに対して日本との同盟を呼びかけている。蘇峰は、日清戦争終結直後から日英同盟論を唱えており、欧米漫遊の主要目的も同盟の下地作りであったという⁶⁴。そのような中で、極東の情勢が緊迫しこれまで消極的であったイギリスが、中国においてロシアへの対抗措置を取ったことを、蘇峰は日本にとって好ましい事態であると捉えたのである。さらに、こうした極東情勢の緊迫は、日英同盟の好機であると考えたと言えるであろう。

おわりに

以上、“The Far East”の第20号から第30号までを概観し、その特徴を紹介すると同時に、社説を中心に、当時同誌が西欧諸国に向けてどのような主張を訴えようとしたのかについて考察した。

欧米漫遊での体験により、日本の事情を世界に向けより強く訴えていく必要性を再認識した蘇峰は、同誌の充実を図った。そして、当時蘇峰が同誌を通じ世界に訴えようとした主な主張は、日本国民の平和的性質であり、日英同盟の妥当性であった。

最後に、今後の研究課題として三点を提示しておくこととしたい。

第一点は、外国人執筆記事の検討である。同

誌には、日本在住外国人が書き下ろしたオリジナル記事が数多く収録されている。こうした記事进行分析することは、彼らが抱いた様々な日本観の発見につながるであろう。

第二点は、同誌と「国民之友」、「国民新聞」の記事内容の比較検討である。独立した雑誌となったとはいえ、同時期に起きた出来事を議題として取り上げる以上それぞれの主張は一貫しているはずである。その上で、同じ問題に対して、国内に向けた論調と海外に向けた論調ではどのような相違があったのかを検討することは、当時の蘇峰の外交観を考える一助となるのではないだろうか。

第三点は、廃刊後の“The Far East”についての考察である。同誌は、明治31年7月の第30号を以って突然廃刊となった。当時、民友社、国民新聞新聞社の経営は逼迫し、「国民之友」「家庭雑誌」もこの時同時に廃刊となっている⁶⁵。編集長であった深井はこの廃刊を惜しんでいるが⁶⁶、廃刊は必ずしも後退ではなかった。“The Far East”は「国民新聞」に吸収されるという形で同紙の1コーナーとして存続した。“The Far East”が月刊誌であったのに対し「国民新聞」は日刊新聞であったため、よりタイムリーな主張を掲載する事が出来た。そして日露戦争中には「国民新聞」紙上の“The Far East”欄は、内閣の意向を直接英語で示す媒体とみなされたという⁶⁷。そうであるならば、国民新聞に吸収された以降の“The Far East”が展開した主張への検討は、当時諸外国が抱いた日本観の考察に有益であると考えられるのではないだろうか。

[投稿受理日2004.11.25/掲載決定日2004.12.2]

注

- (1) 英文を主としていたが、一部仏文、独文記事も掲載されている。仏文、独文記事は、第20号以降増加している。
- (2) 徳富猪一郎『蘇峰自伝（復刻版）』（同志社史料室、平成7年）322-333頁
- (3) 高橋虔『『英文之国民之友』について』同志社大学人文科学研究所編『民友社の研究』（雄山閣出版、昭和52年）354-390頁
- (4) 和文目次も、元来同誌に収録されていたものである。
- (5) 蘇峰の欧米漫遊については、杉井六郎『徳富蘇峰の研究』（法政大学出版局、1977年）254-384頁、澤田次郎「徳富蘇峰のアメリカ旅行」慶應義塾大学法学研究会編『法学研究 第77巻第6号』（慶應義塾大学法学研究会、平成16年6月）35-85頁、参照のこと。
- (6) 柴崎力栄「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について—海軍力と国際情報への着目—」『大阪工業大学紀要 第36巻』（大阪工業大学、1991年10月）20頁
- (7) 拙論、「日清戦争後の徳富蘇峰—『変節』問題と欧米漫遊—」『ソシオサイエンス Vol 11号』掲載予定、参照のこと。
- (8) 前掲、高橋『『英文之国民之友』について』355頁
- (9) 但し、投書が初めて掲載されるのは第21号であり、掲載されない号もある。投書が有無、内容如何によって左右されたためであろう。
- (10) 前掲、高橋『『英文之国民之友』について』354頁
- (11) （財）徳富蘇峰記念塩崎財団編『民友社思想文学叢書 別巻 徳富蘇峰記念館所蔵民友社関係資料』（三一書房、1985年）168頁
- (12) 同上書、169-172頁
- (13) 同様の蘇峰の主張は、「憎黄的悪感」『国民之友』第360号（民友社、明治30年9月10日）に、はっきりと読み取ることが出来る。
- (14) 第30号社説「米西戦争と極東」では、アメリカが極東に求める商業的利益も、日本と協調出来るものだとしてアメリカの極東への介入を歓迎している。
- (15) 前掲、杉井『徳富蘇峰の研究』285頁
- (16) 前掲、徳富『蘇峰自伝（復刻版）』347-351頁
- (17) 和田守、有山輝雄編『民友社思想文学叢書第1巻 徳富蘇峰、民友社関係資料集』（三一書房、1986年）398頁
- (18) 前掲、柴崎「日清戦争を契機とする徳富蘇峰の転換について」23頁

THE FAR EAST

目次 (第20号~第30号)

第2卷第20号 (明治30年9月20日)

口絵

皇太子殿下御肖像

社説

外国より見たる日本 深井英五

日本陸海軍の進歩 (仏文) 人見一太郎

特別寄書

日本人の前途 伯爵 大隈重信

日米交通の起源 新渡戸稲造

日本勸業銀行の成立 河島醇

日本に於ける獨逸哲学 (独文) 三並良

外資輸入 坂谷芳郎

維新後日本の財政 (仏文) エヴラル

雑録

日本の芝居 (絵入) 高橋捨太

陸奥伯 (肖像入)

居留外人の懷奮談 シ・フォンデス

評論

宗教問題, 外国語学雑誌

時事

皇太子殿下御成年, 民間名士の任官, 政務調査委員, 拓殖務省の廃止, 露韓問題, 李竣鎔氏の洋行, 川上中将の西伯利亚行, 伊藤侯の帰朝, 金貨本位, 今年の生糸, 商品陳列館, 日本人名の書方,

訃音: 陸奥伯, 日記

第2卷第21号 (明治30年10月20日)

口絵

紅葉の図

社説

金貨本位の實施

日本陸海軍の進歩 (仏文) 人見一太郎

特別寄書

国文学の将来 坪内雄蔵

帝国の人口 (統計地図入) 吳文聡

日本人種の起源 岸本能武太

過去及現在の労働問題 片山潜

日本に於ける基督教の前途 村井知至

維新後の財政 (仏文) エブラル

雑録

勝伯の伝 (肖像入), 紅葉月

日本刀の構造 チルデン

植物学上邦人の発見 三宅驥一

殉教者のシドッチ 教役者

評論

啓蒙時代ノ精神 (国民の友)

日本婦人の宗教 (宗教)

投書

「日本主義」ニ答フ

時事

朝鮮兵ノ訓練, 朝鮮内閣の変更, 皇帝の称号, 海獣保護会議, 条約改正の進捗, 新条約実施後の監獄制, 政界の活動, 高橋健三氏の辞職, 石黒男爵, 仏国公使の帰国, 京都大学, 外国郵税改正, 台湾鉄道, 横浜正金銀行, 物価の騰貴,

訃音: 山地中将, 佐藤少将, 日記

第2卷第22号 (明治30年11月20日)

口絵

西, 濱尾両大臣

社説

外人の日本に対する新態度

横須賀軍港

特別寄書		日本に於ける工業権の保護	福間文太郎
国文学の将来 (続)	坪内雄蔵	日本美術の将来	ドウマン
蒔絵の沿革	文学博士 黒川真頼	雑録	
日清戦争間檢疫事業	後藤新平	竹取物語 (仏文, 続)	吉田美静
日本主義と世界主義	小松緑	歳の市, 箕作鱗祥男, 台湾砂糖の分析	
日本の国体	山口造酒	三百年前の西班牙及日本, 人魚の話	
日本美術の将来	ドウマン	シドッチ (続)	教役者
雑録		評論	
竹取物語 (仏文)	吉田美静	条約実施後の教育と宗教, 仏僧と基督教宣教師の比較, 商工概況, 喜賓会, 航海案内	
勝伯の伝 (続)		大日本	
菊 (挿画入)	濱田ちき	時事	
殉教者のシドッチ	教役者	極東問題, 支那分割の警報, 北京談判, 韓国財政顧問, 日本現時の政況, 松方伯の財政策, 戦後の経営, 増税の必要, 経済界救助策, 極東の列国艦隊, 日本の人口, 万国婦人矯風会, 日本民法翻訳,	
評論		訃音: 森田文蔵氏 箕作鱗祥男, 日記	
中尊寺 (国民新聞), 仏徒の運動 (伝道雑誌)			
新興日本の事業 (国民の友)			
投書			
日本の富源			
時事			
内閣の変動, 進歩党と政府, 韓国度支顧問問題, 英国と日本, 海獣保護会議, 伊藤侯と内地雑居, 富士艦の到着, 日本将来の海軍力, 大阪及長崎の築港, 日清間の交際, 陸軍演習, 監督ピカステス氏紀念資金, 日記			
第2巻第23号 (明治30年12月20日)		第3巻第24号 (明治31年1月20日)	
口絵		口絵	
歳の市		伊藤侯の肖像	
社説		社説	
膠州湾の占領		日本国民の根本的問題	
特別寄書		特別寄書	
日本貴族及其教育	近衛篤磨	外人の株券所有と現行条約	パリストル 増島六一郎
日本に於ける新聞事業	高島捨太	日本貴族及其教育 (完)	
職工条例の必要	早川鉄治	公爵 近衛篤磨	
商業者高等教育の必要	高木正義	日本に於る哲学思想の発達	文学博士 井上哲次郎
		日本の女子教育	成瀬仁蔵
		条約改正と言語	佐久間信恭
		泰西思想と日本文明	中村桂次郎

裸体画の濫用	フエノロサ	不思議の花嫁	
雑録		能楽の半紙 (絵入)	大和田建樹
一角仙人 (謡曲翻訳)		雛祭, 禅学	
	法学博士 和田垣謙三	唐崎の松 (詩)	フエノロサ夫人
能楽の話 (絵入)	大和田建樹	評論	
竹取物語 (仏訳完)	吉田美静	徳富氏の孔子論, 海峡支那雑誌, 雑誌界	
仏陀の教法	忽滑谷快天	時事	
相模, 陶器画の新法		清国の外債談判, 償金の払込, 英国の東方	
殉教者シドッチ (完)	教役者	策, 米国と極東事件, 獨逸の再要求, 朝鮮	
評論		の政変, 総選挙, 元帥府の設置, 新参謀総	
雑誌界, 「神の国の成長」		長, 時勢の徴候, 万国平和協会と極東, 日	
時事		本銀行の利子引上	
第十一議會, 増税問題, 松方内閣の辞職, 伊		訃音: 坪井中将 山川少将 加納夏雄氏	
藤侯の出現, 新内閣の顔触, 官界の移動, 支		日記	
那問題, 列国の態度, 英国と日本, 昨年の外			
国貿易, 訃音: 島津忠義公, 日記			
第3巻第25号 (明治31年2月20日)		第3巻第26号 (明治31年3月20日)	
口絵		口絵	
羽衣		西郷隆盛翁	
社説		社説	
極東の形勢		人類と人種	
特別寄書		特別寄書	
極東の時局	有賀長雄	日本に於ける基督教の現状	小崎弘道
日本の経済の現状	小崎成章	日本の基督教	高橋五郎
地理上の極東	田中阿歌麿	日本美術管見	金子堅太郎
条約改正と言語	佐久間信恭	地理上の極東 (続)	田中阿歌麿
泰西思想と日本文明	中村桂次郎	日本人と貯蓄銀行	北島亘
婦人の為にあらず	津田梅子	日本に於ける官設富籤案	東京大学教授 リース
日本の婦人	クレー・マコレー	雑録	
雑録		釈迦降誕祭	忽滑谷快夫
桐一様	エー・ロイド	吉野桜花案内, 西郷隆盛翁	
羽衣		始めて大名を訪ふ	故フルベッキ
日本に於ける人類学の進歩	三宅驥一	歌舞伎座三月狂言	
		評論	

雑誌界, 勝伯の支那論

時事

清国に対する露国の要求, 英国政策の宣言,
独国と仏国, 清国の外債, 韓国の政変, 臨時
総選挙, 台湾三十年祭, 日鉄機関手の同盟罷
工

訃音: 山階の宮, 大院君, フルベツキ氏, 日
記

第3巻第27号(明治31年4月20日)

口絵

豊太閤の墓

社説

極東の均整

特別寄書

同志社の過去及び将来 横井時雄
台湾の阿片 水野遵
日本に於ける基督教の現状(続)

小崎弘道

地理上の極東(続) 地図入 田中阿歌麿

日本の基督教(続) 高橋五郎

日本の労働者の現状 高木正義

台湾に於ける基督教 カンベル

雑録

五月相撲(絵入) 高島捨太

臨時軍事費支払転末 坂谷芳郎

西郷隆盛翁, 奠都三十年祭(絵入)

五月の節句(絵入), 豊国祭

評論

雑誌界

投書

日英同盟の希望 英国議員某氏

時事

遼東に於ける露国, 露国と韓国, 仏国の要求,

英国の示威運動, 日本の政策, 清国の償金支
払, 総撰拳の結果, 奠都三十年祭, 訃音: キ
ヨソ子氏

第3巻第28号(明治31年5月20日)

口絵

日光の景

社説

経済及び財政問題

特別寄書

日本の仏教 忽滑谷快夫

日本人の商業道德 福沢一太郎

日本貨幣制度 小手川豊二郎

日本の漁業 伊藤一隆

地理上の極東(続) 田中阿歌麿

同志社の過去及び現在 ラルネツド

目下の問題 小林米珂

日本人の体育 博士 ベルツ

雑録

活花哲学 中島泰蔵

日本華族女子の教育 山口造酒

日本の養蚕, 日光の大祭

投書

何を義戦と言ふ イト・エッチ・ハウス

評論

雑誌界

時事

日露新協商, 福建省の不割譲, 沙市の暴動,
現今の政界, 内閣の変動, 第十二議会, 法典
と臨時議会

第3巻第29号(明治31年6月20日)

口絵

華族女学校

社説

日本に於ける議院政治

特別寄書

東京貸資協会 佐久間貞一
 現今経済界の困難及び救済策 小崎成章
 日本貧民救助法 呉文聡
 日本の仏教(続) 忽滑谷快夫
 日本の漁業(続) 伊藤一隆
 撰挙法改正案 林田亀太郎
 日本未拓の財源 シー・イー・ガルスト
 日本初感 チ・エス・ベルリ
 地理上の極東(続) 田中阿歌麿

雑録

日本金魚の事 服部他助
 日本の農業
 二宮尊徳翁 小塚貞義
 横井小翁追悼会、華族女学校

評論

東洋学芸雑誌, 東亞, 東京独立雑誌

投書

シカゴ大学と日本 クレメント

時事

第十二議會, 開会の勅語, 衆議院に於ける諸党派, 上奏案の否決, 撰挙法改正案, 増税案, 法典の実施, 在野党の大合同, 在朝党組織, 日記

第3巻第30号(明治31年7月20日)

口絵

大隈板垣二伯の肖像

社説

米西戦争と極東

特別寄書

工業の現状 有賀長文

日本児童の發育 三島通良

本邦将来の教育学 谷本富

日本の仏教(続) 忽滑谷快夫

日本の貨幣制度(続) 小手川豊二郎

日本に於ける基督教の前途 三並良

資本の欠乏 ドロップース

雑録

孟蘭盆会(絵入) 高島捨太

日本に於ける婚姻(絵入) 小沢政許

始めて米国に帰化せし日本人

クレメント

評論

英国民法及び商法, 加藤博士の宗教論

時事

政界の大変動, 憲政党の組織, 憲政党の宣言, 伊藤侯の辞職, 新内閣, 官海の変動, 政界の将来

訃音: 神田孝平男, テンナント氏, 日記